「箸の持ち方・使い方」指導のための基礎的研究

－１歳児から５歳児の実態と「伝統型」習得のための要点－

宇都宮通子*・五島　淑子

A Fundamental Study on Teaching How to Hold and Use Chopsticks
－ The actual conditions of children aged 1 to 5 and the important aspects of learning the way to hold and use chopsticks in a traditional style －

USTUNOMIYA Michiko* and GOTO Yoshiko
(Received January 15, 2008)

キーワード：幼児、箸の持ち方・使い方、伝統型

はじめに

向井・橋本[1]は、「伝統的な持ち方ができるようになる一つの条件は、箸が持てるようになった年齢（２歳前後）で家族に伝統的な持ち方を教えられていること」とし、３歳頃から継続的訓練が必要であると述べ、幼児期における「箸の持ち方・使い方」教育の重要性を指摘している。

「幼児期」は、人として、文化的・社会的人間として適応していく力を身につける重要な時期である。箸を持ち始めてからの発達や習熟および環境の影響に伴う「伝統型」の習得率の推移を明らかにすることや、幼児が箸を持って食べ物に向かい、箸の使用に適応していく様子を把握することは、幼児期の箸使いの実態を把握する上で重要な事項である。

幼児の箸の使用に関する先行研究では、「箸の持ち方の発達段階」[2)3)]、「箸の持ち方と作業量の関係」[4)] などが検討されてきた。しかし、集団保育の食事場面で「伝統型」の習得状況を把握した研究は例が少なく、特に１・２歳児の「箸の持ち方・使い方」についての研究は見当たらない。

保育所・幼稚園に通う幼児は、１日の食事回数の３分の１の食事を集団保育の場において行っている。このことから、保育所・幼稚園における食事場面での「箸の持ち方・使い方」の状況を調査することは、幼児期の箸使いの実態把握につながると考えられる。

そこで、「伝統型」の習得に影響を与える事項について明らかにし、「箸の持ち方・使い方」を指導する一資料とするため、幼児の「箸の持ち方・使い方」について保育所・幼稚園において観察による調査を行うことにした。

＊山口大学大学院教育学研究科

1．調査の対象と目的・方法

1－1　第１回調査

目　的：「箸の持ち方・使い方」の指導をするために、箸を使用し始めた幼児の「箸の持ち方・使い方」の実態を把握する。

時　期：2006年８月17日　～　９月14日

対　象：Ａ保育園（山口市）、Ｂ保育園（山口市）、Ｃ保育園（山口市）、Ｄ保育園（防府市）、Ｅ幼稚園（山口市）に通う２歳児から５歳児までの幼児442人。園ごと、年齢ごとの内訳は、表１に示した。

表１　第１回「箸の持ち方・使い方」調査人数（人）

クラス	A 保育園	B 保育園	C 保育園	D 保育園	E 幼稚園	合計
１歳児	0	0	0	0	0	0
２歳児	20	14	6	0	0	40
３歳児	31	26	8	21	14	100
４歳児	34	27	11	14	63	149
５歳児	31	33	18	19	52	153
合計	116	100	43	54	129	442

内　容：年齢クラス別「伝統型」の習得状況

方　法：「伝統型」をしている幼児の人数を数え、年齢クラス別に記録した。

1－2　第２回調査

目　的：第１回「箸の持ち方・使い方」調査から６ヶ月間の時間経過に伴う「箸の持ち方・使い方」の変化を明らかにするために、「箸の持ち方・使い方」の実態把握を行う。

また、「箸の持ち方・使い方」の指導の要点を明らかにするために、「箸の持ち方・使い方」に見られる箸の交差・持ち代の２本の棒の間隔を把握する。

時　期：2007年２月19日　～　２月28日

対　象：Ａ保育園（山口市）、Ｂ保育園（山口市）、Ｃ保育園（山口市）、Ｄ保育園（防府市）、Ｅ幼稚園（山口市）に通う１～５歳児までの幼児499人。園ごと、年齢ごとの内訳は、表２に示した。

表２　第２回「箸の持ち方・使い方」調査人数（人）

クラス	A 保育園	B 保育園	C 保育園	D 保育園	E 幼稚園	合計
１歳児	6	11	0	0	0	17
２歳児	24	20	7	17	0	68
３歳児	35	27	5	22	11	100
４歳児	36	34	13	18	59	160
５歳児	26	37	18	22	51	154
合計	127	129	43	79	121	499

内　容：中指に注目した類型別、男女別、使用する手別の「箸の持ち方・使い方」、上箸と下箸の間隔、上箸と下箸の交差の有無

方　法：中指に注目して作成した５類型のチェックリストを用い、必要事項を記入した。

１－３　掌の長さの測定

目　的：幼児の掌の長さと箸の適切な長さの関係を明らかにするために、掌の長さの測定を行う。

時　期：2007 年３月 15 日

対　象：Ａ保育園(山口市)に通う、箸を使用している１歳児から５歳児 89 人

内　容：年齢クラス別、掌の長さの測定

方　法：１歳児クラス・２歳児クラスの幼児は、直接掌に定規を当てて測定した。３～５歳児クラスの幼児は、作品として作成されていた手形・足形を利用して、測定を行った。なお、手形・足型の作品は、2007 年３月に作成された作品を使用した。

２．調査について

調査・観察・写真撮影は、公立の園は、市教育委員会と園長の許可、私立の園は、園長の許可を得て実施した。

３．結果と考察

３－１　第１回調査

３－１－１　年齢クラス別「伝統型」習得状況

「伝統型」をしていた幼児の比率を、表３に示した。２歳児クラス 2.5%、３歳児クラス 5.0%、４歳児クラス 6.7%、５歳児クラス 9.8%であった。「伝統型」の習得率は、年齢クラスが上がるにつれて増加した。1 歳児クラスは、箸の使用をしておらず、調査対象者はいなかった。

表３　「伝統型」の習得状況（第１回調査）

クラス		「伝統型」（人）	比率（%）
２歳児クラス	n=40	1	2.5
３歳児クラス	n=100	5	5.0
４歳児クラス	n=149	10	6.7
５歳児クラス	n=153	15	9.8
合　計	n=442	31	平均 7.0

保育所では、幼児が２歳の時に、食具をスプーンやフォークから箸に持ち変えさせていることがわかった。その時期は、１歳児クラスで２歳の誕生日になったら箸を持たせる園、２歳児クラスになってから一斉に持たせる園、２歳児クラスの後半期に一斉に持たせる園、

一人ひとりの手の発達などを確認して箸を持たせる園など、園の方針によって多様であった。

３－1－２　「伝統型」を習得した方法

第１回調査で「伝統型」をしていた幼児は、どのようにして「伝統型」を習得したのかを明らかにするために、「伝統型」をしていた５歳児の 15 人に対し、「なぜこの持ち方ができるようになったのですか」と口頭で質問をした。その結果を表４に示した。

表４「伝統型」の習得理由

理　由	(人)	(%)
母親に教えてもらった	7	46.7
祖父母に教えてもらった	4	26.7
父親に教えてもらった	1	6.7
まねをした	1	6.7
わからない	2	13.3
合　計	15	100.0

親や祖父母から教えてもらったと答えた幼児が、15 人中 12 人で、約８割であった。

谷田貝[4]は、「箸の持ち方は、家庭での教育が影響を与えている」としているが、本調査でも同様の結果を得たと考えられる。

「まねをした」と答えた幼児が１人いることから、家庭や集団保育の食事場面がモデリングの機会を提供している可能性が考えられた。

３－２　第２回調査

調査対象児の年齢クラス・類型・性別・使用する手（左右）を簡単に記入できるように記録表を作成し、食事中の一人ひとりの箸の持ち方や使い方を観察し、記録表に記入した。類型については、中指の位置や動かし方に注目し、類型１から類型５までを決定した。各類型の特徴を次に示した。類型１～５は、写真１～５の通りである。

写真１　類型１　握り箸

この型は、５本の指すべてで２本の箸を握り、握り方を緩めたり、強めたりすることで、食べ物を掴み取るものである。また、箸を使う前のフォークの持ち方と同じ持ち方である。

写真２　類型２　中指が上箸の上

この型は、中指が箸の上にあることが特徴で、中指の薬指側または、指紋のある側で箸を支える。２本の箸の上から、中指で押さえるため、上箸と下箸が開かない場合が多い。

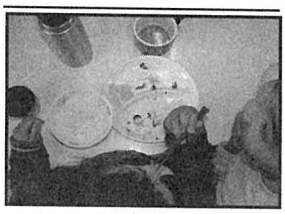

写真３　類型３　中指が下箸の下

この型は、中指が箸の下にあることが特徴で、２本の箸を中指の人差指側か、つめ側で支える。２本の箸先がつきにくい。「鉛筆型」ともいわれる。

写真４　類型４　中指の指紋側で上箸を支える

この形は、中指の指紋側が箸に接することが特徴である。そのため、力が入りやすく、箸の交錯が生じる頻度が高い。人差し指が上箸に、中指が下箸に位置し、人差し指が強く押されると、下箸が前に出る。

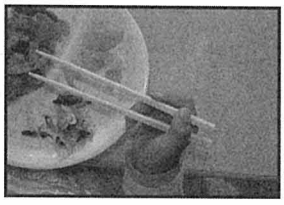

写真５　類型５　伝統型

この型は、中指の人差指側で、箸を支え、薬指の中指側で、下箸を支える。中指を動かすことによって、上箸のみが動くことが特徴である。

３－２－１　年齢クラス別・類型別「箸の持ち方・使い方」

調査の結果を表３に示した。

表３　年齢クラス別・類型別「箸の持ち方・使い方」

	類型１	類型２	類型３	類型４	類型５	合計
１歳児クラス	7 (41.2)	4 (23.5)	5 (29.4)	1 (5.9)	0 (0.0)	17 (100.0)
２歳児クラス	20 (29.4)	13 (19.1)	24 (35.3)	9 (13.2)	2 (2.9)	68 (100.0)
３歳児クラス	18 (18.0)	18 (18.0)	30 (30.0)	26 (26.0)	8 (8.0)	100 (100.0)
４歳児クラス	2 (1.3)	18 (11.3)	63 (39.4)	39 (24.4)	38 (23.8)	160 (100.0)
５歳児クラス	0 (0.0)	8 (5.2)	61 (39.6)	37 (24.0)	48 (31.2)	154 (100.0)

注）（　）内は%

「１歳児クラス」は、類型１（握り箸）が４割を超えており、最も多かった。また、類型５（伝統型）はいなかった。１歳児クラスで類型３（鉛筆型）をしていた理由は、「伝統型」を「じょうずな持ち方」として、中指・薬指・小指を箸の下に入れることを方向付けた集団保育の影響の可能性がある。

「２歳児クラス」は、類型３が最も多かった。また、１歳児クラスと比較し、類型１が減少し、類型４が増加した。理由として、指で押す力が強まってきたことが考えられる。

「３歳児クラス」は、類型１が全体の２割以下となり、１歳児クラスと比較すると、半分以下に減少している。２歳児クラスと同様に類型３が最も多いが、ついで類型４が多く、２歳児クラスの約２倍となった。

「４歳児クラス」は、類型３が約４割となり、最も多かった。しかし、類型１はほとんど見られず、類型５(伝統型)が２割を超えた。

「５歳児クラス」は、類型１がいなくなり、類型５（伝統型）の幼児が３割を越えた。また、類型５（伝統型）に見た目がもっとも近い、類型３（鉛筆型）が約４割となった。

年齢クラス別・類型別「箸の持ち方・使い方」の結果を図１に示した。

「類型１」「類型２」「類型３」「類型４」「類型５」の比率が、「年齢クラス」が上がるにしたがって、類型１が減少し、類型５が増加した。このことから、年齢クラス間の類型の比率に差があることがわかった。

伊与田ら[3]は、幼児の食具の持ち方を観察し、「高頻度の持ち方は年齢が高くなるに従い、『上から掌で握る発達段階の低い持ち方』から『下から分化した指で握る発達段階の高い持ち方』を示した」と報告している。「年齢クラスが上がるにしたがって「箸の持ち方・使い方」が発達的変化をしていく」ことは、本研究の結果と同様であった。

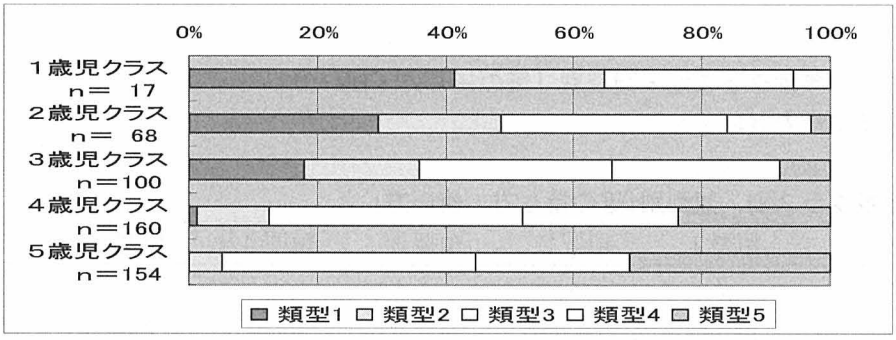

図１　年齢クラス別・類型別「箸の持ち方」の比率

３－２－２　性別、類型別「箸の持ち方・使い方」

対象幼児の男女の比率は、男児 53.3%、女児 46.7%であった。男女別にみた「箸の持ち方」の類型別の比率を図２に示した。性別と類型間でχ^2検定を行った結果、有意な差が認められなかった。

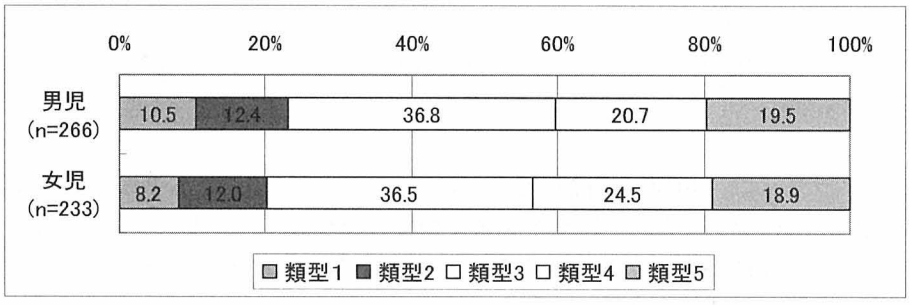

図２　性別・類型別「箸の持ち方・使い方」の比率

３－２－３　箸を持つ手別、類型別「箸の持ち方・使い方」

対象幼児の箸を持つ手は、右手 92.2%、左手 7.8%であった。箸を実際に使っている場面を観察によって調査したため、利き手ではなく、箸を使う手の確認を行った。

箸を持つ手別からみた類型別の「箸の持ち方・使い方」の比率を図３に示した。箸を使う手と類型間でχ^2検定を行った結果、有意な差が認められなかった。

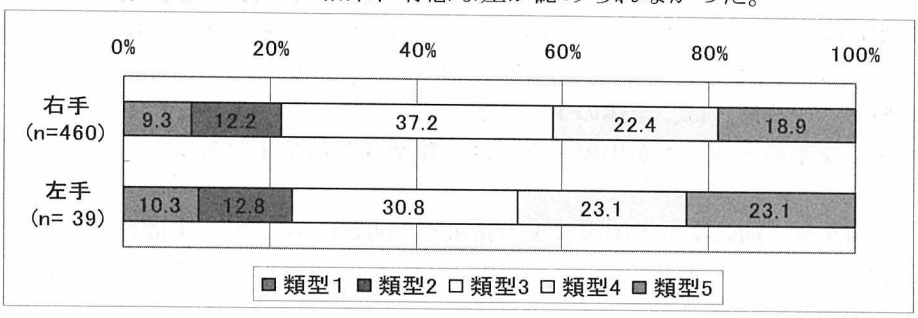

図３　箸を持つ手別・類型別「箸の持ち方・使い方」の比率

３－２－４　類型別、年齢クラス別にみた箸の交差の有無

幼児の「箸の持ち方・使い方」を観察すると、箸が交差している場合が見受けられた。交差の出現のタイミングに注目すると２通りあった。持ち方が交差している場合と、持ち方には交差がないが使うときに交差が出現する場合である。

また、交差の位置に注目すると２通りあり、箸の「使い代（人差し指と親指の中心辺りで、手と箸があたる位置より下側）」にできる場合と「持ち代（人差し指と親指の中心辺りで、手と箸があたる位置より上側）」にできる場合であった。ここでは、使い代にできる交差を「下交差」、持ち代にできる交差を「上交差」と記述する。

類型別にみると、下交差は類型２・類型３・類型４で、上交差は類型３・類型４・類型５で出現していた。類型別の箸の交差の出現状況を図４に示した。

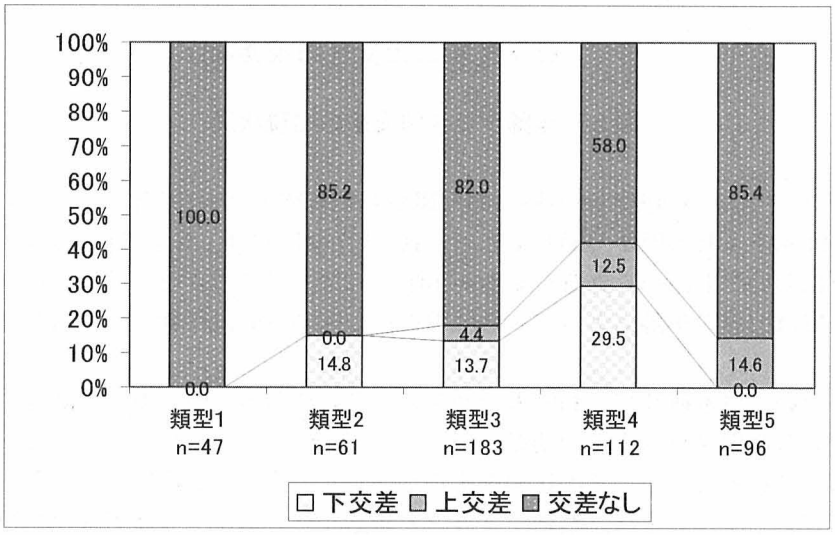

図４　類型別箸の交差の出現状況

類型５（伝統型）で上交差が出現する場合は、中指の位置や使い方は正しいが、持ち代の間隔が狭い場合と箸の持ち代部分が手に対して長すぎる場合であった。類型５（伝統型）は、本来交差が出現しないのだが、幼児の場合手が小さいために、持ち代の間隔が十分開かずに、食事時の箸を開いた場面で、上交差が出現する場合があることが観察によってわかった。そこで、「伝統型」で上交差が現れる場合は、上交差ありの「伝統型」とした。類型５（伝統型）96 人のうち、14 人（14.6%）に上交差の出現が見られた。類型５（伝統型）で交差がなかったのは、82 人（85.4%）で、調査対象者の 16.4%であった。つまり、交差のない完全型の「伝統型」は、全体の 16.4%となった。

下交差・上交差のどちらもが出現するのは、類型３と類型４であった。

次に、年齢クラス別に交差の出現状況の結果を、図５に示した。「１歳児クラス」をのぞく、「２歳児クラス」「３歳児クラス」「４歳児クラス」「５歳児クラス」で、上交差・下交差の両方が出現していた。

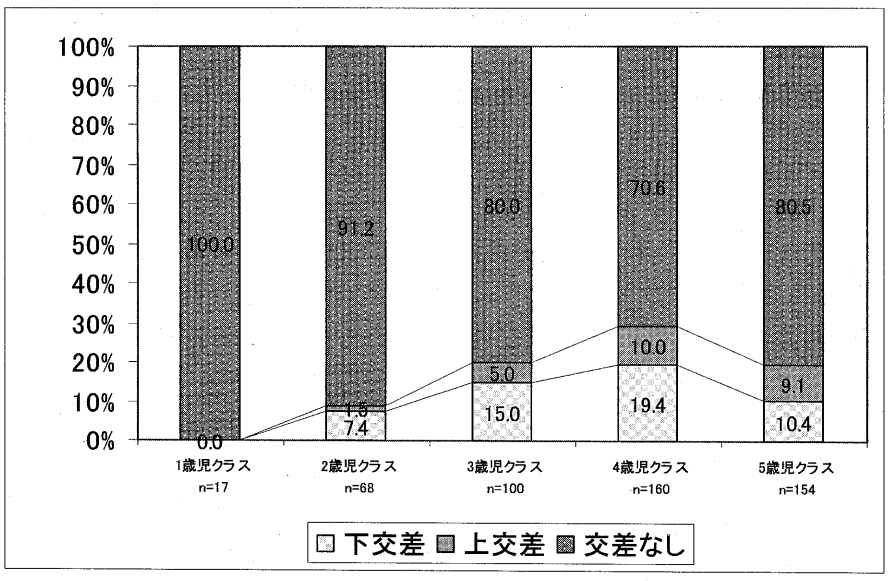

図５　年齢クラス別交差の出現状況

大岡ら[5]が、５名の幼児の箸の持ち方を観察した研究では、「遠箸と近箸が交差するＸ箸は、生後 44～51 ヶ月の児に共通して認められ、幼児期におけるＸ箸は低年齢のみならず、４～５歳児においても認められる可能性が示唆された。」としている。また「近箸と遠箸が交差する位置は、児の年齢によって、箸の中央から箸頭方向に移動する傾向が見られた。」としている。

この点については本研究で、499 人の幼児の「箸の持ち方・使い方」の調査から、２歳児クラスから５歳児クラスまでの幼児について、「上交差」「下交差」「まっすぐ」の３パターンが出現していることと、その比率を明らかにした。また、２歳児クラスから４歳児クラスにかけて、上交差の出現が増加することを確認しているが、５歳児クラスでは、４歳児クラスよりも上交差・下交差ともに減少し、交差のない持ち方・使い方が増加するという結果を得た。

５歳児クラスで、交差が減少した理由として、各指の力のバランスが整ってきて、箸をコントロールしやすい手指の機能充実の結果が関係していると考えられる。

また、交差の有無は、幼児の指の力の発達と関係があると同時に箸を持つときの箸の間隔と関係が深いと推測できる。

３－２－５　類型別、年齢別にみた箸の間隔

箸を使って食事をするためには、２本の箸を独立して動かし、食べ物を挟む、つまむ、すくう、切り分けるなどの操作をしなければならない。そこで、上箸と下箸の持ち代部分の間隔に注目して、「不分離」「５㎜以下」「６～10㎜程度」「11㎜以上程度」の４段階に分けて観察した。箸に交差があっても、持ち代部分に間隔がある場合は、「間隔あり」とし、測定した。

類型別の「箸の間隔」を表４に示した。

「類型２」「類型３」「類型４」の403人のうち、６㎜以上の間隔があったのは、４人（１%）であった。

表４　類型別箸の間隔

	不分離	５㎜以下	６～10㎜	11㎜以上	合　計
類型１	47（100.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	47（100.0）
類型２	60（98.4）	1（1.6）	0（0.0）	0（0.0）	61（100.0）
類型３	156（85.2）	26（14.2）	1（0.5）	0（0.0）	183（100.0）
類型４	105（93.8）	4（3.6）	1（0.9）	2（1.8）	112（100.0）
類型５	0（0.0）	51（53.1）	28（29.2）	17（17.7）	96（100.0）
合　　計	369（73.7）	82（16.4）	30（6.0）	19（3.8）	499（100.0）

次に、年齢クラス別箸の間隔の結果を表５に示した。

表５　年齢クラス別箸の間隔

	不分離	５㎜以下	６～10㎜	11㎜以上	合　計
１歳児クラス	17（100.0）	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）	17（100.0）
２歳児クラス	66（97.1）	1（1.5）	1（1.5）	0（0.0）	68（100.0）
３歳児クラス	84（84.0）	13（13.0）	2（2.0）	1（1.0）	100（100.0）
４歳児クラス	107（66.9）	34（21.3）	12（7.5）	7（4.4）	160（100.0）
５歳児クラス	94（61.0）	34（22.1）	15（9.7）	11（7.1）	154（100.0）
合　　計	368（73.7）	82（16.4）	30（6.0）	19（3.8）	499（100.0）

箸の間隔が０㎜である幼児の比率は、年齢クラスが高くなるにしたがって減少した。また反対に11㎜以上箸の間隔がある人の比率は、年齢クラスが高くなるに従って増加した。

岩田ら[6]は、幼稚園の年少・年中・年長の箸の分離状態を調査し、年齢クラスによる有意差がなかったとしているが、今回の調査では、年齢クラスが高くなるに11㎜以上の間隔の幼児が増加した。年齢が高くなるにつれ、手が大きくなることで、箸を握る手に２本の

箸の間隔を開く余裕が生じたり、食べ物を摘むために意識的に箸を開こうとしたりするようになったためと考えられる。

類型別・年齢別クラス別の「箸の持ち方・使い方」の調査から、「伝統型」を習得するためには、箸を持ったときに、２本の箸の間隔をとるようにすることが、重要であることがわかった。このことは、「伝統型」習得のための指導をおこなう時の要点となる。

３－２－６　第１回調査と第２回調査の結果の比較

第１回調査と第２回調査には６ヶ月の間があり、幼児自身はこの間、心身ともに発達をしている。それに加え、第１回調査を行った保育園・幼稚園では、「箸の持ち方・使い方」に関して直接的・間接的な働きかけが行われた。

直接的な働きかけとは、昼食時に、じょうずな持ち方として保育士がモデルとなって「箸の持ち方・使い方」を見せたり、「伝統型」を習得している幼児をモデルとして示し、ほめたり、じょうずな持ち方をすると「こぼれない」「きれい」など、言葉で「伝統型」をした時に得られる効用を伝えたりすることである。

また間接的な働きかけとして、保護者への啓発活動が行われた。保護者参観日や給食だより・園通信を通して、箸の持ち方のモデルの提示が行われたこと、鉛筆の持ち方との関連なども用いて、「伝統型」習得への啓発が行われたことがあげられる。幼児の発達段階から判断して、「握り箸」からの発達が見られないと保育者が判断した場合、家庭との対話をもとに共同して声かけを行った事例も４件あった。しかし、今回の調査では、保護者への調査をおこなっておらず、影響の程度については把握できなかった。

第１回調査と第２回調査の「伝統型」の幼児の比率を図６に示した。

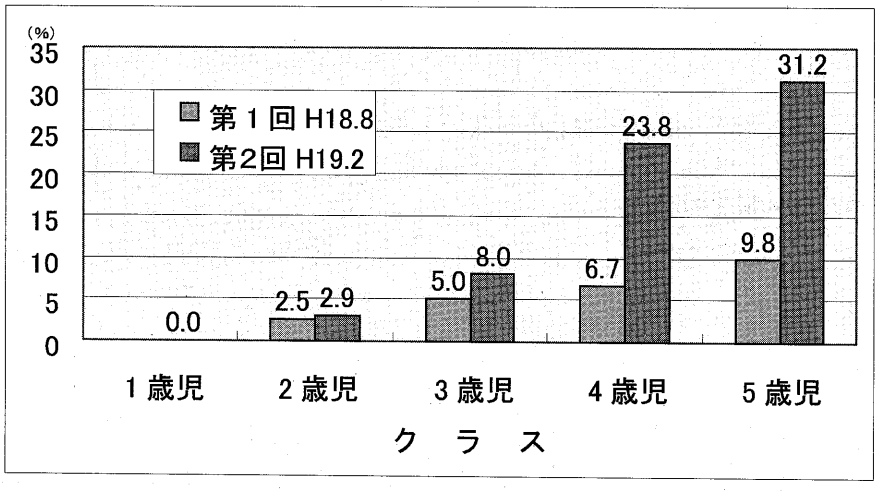

図６　第１回調査と第２回調査の結果比較

第１回調査・第２回調査ともに年齢が上がるにしたがって、「伝統型」が増加した。

第２回調査では、すべての年齢で、「伝統型」が第１回調査の結果を大きく上回った。４・５歳児クラスで、伸びが顕著に現れ、３割程度となった。４歳児クラスの第１回調査結果より、３歳児クラスの第２回調査結果のほうが、「伝統型」習得者が高い比率となっている。このことは、１回調査と２回調査間の心身の発達と働きかけが影響を与えた可能性がある。

岩田ら[6]は、幼児の箸の持ち方を観察した結果、「年長とそれ以下の年齢群の間に箸を持つという微細運動の発達に関し、発達の節目とでもいうようなものが存在していることを推察させる。」とし、手指の発達が、5歳児クラスで顕著であることを明らかにしている。

働きかけの効果によって「伝統型」の習得率が伸びたと仮定すると、「働きかけ」は、特に4歳児クラスの幼児の反応や効果が大きいと考えられ、箸の持ち方・使い方の習得には適時性があると考えられる。

3－3　掌の長さの測定

3－3－1　掌の長さ

掌の長さを測定した結果を表6に示した。

平均は、1歳児クラス 10.2cm、2歳児クラス 10.9cm、3歳児クラス 11.2cm、4歳児クラス 11.9cm、5歳児クラス 12.3cm であった。「手形」は、指先や手首の辺りが映りにくく、実際の手の長さより、0.5cm 程度短く写っていることを、実際の幼児の手の長さと比較し確認した。おおよそ 0.5cm の誤差が生じていると考え、計測値に 0.5cm の誤差分を加えた。

表6　幼児の掌の長さ

年齢	掌の大きさ（cm）
1歳児クラス（ほぼ2歳）　n=5	10.2cm
2歳児クラス（ほぼ3歳）　n=16	10.9cm
3歳児クラス（ほぼ4歳）　n=20	(11.2cm ＋ 0.5cm)　11.7cm
4歳児クラス（ほぼ5歳）　n=28	(11.9cm ＋ 0.5cm)　12.4cm
5歳児クラス（ほぼ6歳）　n=20	(12.3cm ＋ 0.5cm)　12.8cm

写真6は、計測に用いた「手形」の写真である。

幼児の掌の長さは、年齢とともに長くなった。一色[7]は、箸の最も使いやすい長さを、掌の 1.1～1.2 倍としている。幼児の手の長さを 1.2 倍にすると、1歳児クラス 12.2cm、2歳児クラス 13.1cm、3歳児クラス 14.0cm、4歳児クラス 14.9cm、5歳児クラス 15.4cm 程度となり、1歳児クラスには 12cm 程度、2歳児クラスには 13cm 程度、3歳児クラスには 14cm 程度、4・5歳児クラスには 15cm 程度の箸の長さが適当であることがわかった。

写真6　計測に用いた手形

調査を行った園では、1・2歳児クラスに 15cm の園所有の箸を使用し、3・4・5歳児クラスは、各家庭から箸を持参している。15cm の箸は、おおむね4・5歳児クラスに適当な長さとなる。

年齢クラス別に、幼児の掌の長さ、掌の 1.2 倍の長さ、園で使用している箸の長さ、一般的に市販されている箸の長さの関係を図7に示した。

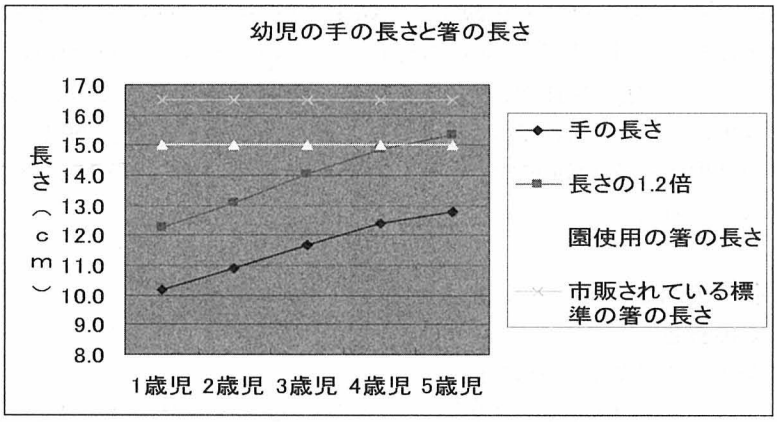

図７　幼児の掌の長さと箸の長さ

３歳児クラスから５歳児クラスが家庭から持参している箸の長さをみると、16.5cm と 18cm の２種類が大半を占めていた。特に 18cm の箸は、幼児の手には長すぎて、扱いにくく、２本の棒（箸）間隔が開きにくく、箸の持ち代が長くなるために、上交差が出しやすい。

写真８、写真９は、２本の箸間が開いていない様子と持ち代に上交差が出現している様子である。

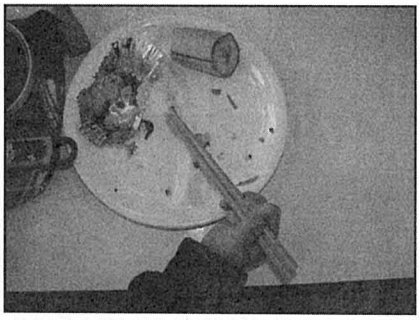

写真８　箸の間隔なし（18cm の箸使用）

写真９　上交差の出現（18cm の箸使用）

調査の結果から、箸の使用の習得時期に手に合わない箸を使用している場合、「伝統型」の習得を妨げる可能性があると考えられる。

「伝統型」を習得するためには、手の大きさにあった箸の使用を行うことが重要となる。

子供用として市販されている箸の長さをスーパーマーケットで調査すると、調査を行った６店舗すべて、最も短い箸は 16.5cm の箸であった。16.5cm の箸は、５歳児クラスにもやや長いという結果を得ていることから、幼児に適当な箸はスーパーマーケットでは、手に入りにくいことがわかった。

３－４　箸の持ち方・使い方に影響を与える事項

幼児の「箸の持ち方・使い方」の実態を調査し、幼児の「伝統型」の習得率、「箸の持ち方・使い方」の型に影響を与える事項を明らかにした。

（1）幼児の「伝統型」の習得率

第1回調査の結果、2歳児クラス2.5%、3歳児クラス5.0%、4歳児クラス6.7%、5歳児クラス9.8%であった。

6ヶ月の時間の経過とその間の幼児を取り巻く人による働きかけと幼児自身の心身の発達による影響が考えられる第2回調査では、1歳児クラス0.0%、2歳児クラス2.9%、3歳児クラス8.0%、4歳児クラス23.8%、5歳児クラス31.2%であった。

（2）「箸の持ち方・使い方」に影響を与えると考えられること

① 家庭での教育

2006年9月に行なった第1回調査で、「伝統型」をしていた5歳児の15人のうち8割が、家庭で親や祖父母に「伝統型」の持ち方を教えられて持てるようになったと回答したことから、「家庭での教育」は、「伝統型」習得のために大きな影響を与えると考えられる。

② 幼児を取り巻く人による働きかけ

第1回調査と第2回調査を比較した時に、第2回調査時に「伝統型」の習得率が上昇していた。これは、第1回調査から、第2回調査までの間に、保育者・観察者が指導者となり、「伝統型」の意図的な指導を行ったことが考えられた。このことから、「伝統型」習得には、「伝統型」を正確に指導できる指導者の存在が大きいと考える。

③ 幼児の心身の発達

「働きかけの効果」と「手指の発達」は、ともに「伝統型」習得のために必要な要点である。「手指の発達」についての調査はおこなっていないので、その影響はわからない。しかし、「箸の持ち方・使い方」の習得に向かう姿勢に違いが見られ、4歳児クラスから、特に箸の持ち方や取り組む様子の変化が顕著であった。4歳児クラスで「伝統型」の習得率が大きく伸びた理由として、仲間とともに上達しようとする雰囲気があり、指導者に対して、積極的に質問をするなど、「伝統型」の習得に意欲があった。このことから、「伝統型」の習得には、内発的な動機も影響を与えると考えられる。また、心身の発達から、幼児の「伝統型」の持ち方の働きかけは、4～5歳時に適時性が大きいと考えられる。

④ 伝統型箸の持ち方・使い方の知識

幼児は、食事をする時に食欲を満たすことが優先となり、箸を自分が食べやすい持ち方で使用する。「伝統型」の持ち方を習得していた幼児の8割は、家庭で「箸の持ち方・使い方」を指導されていた。「伝統型」の習得には、教育や働きかけが重要であるが、その時に箸と指の正しい位置や、指の動かし方などを教える必要がある。

正しい位置として、幼児の場合、持ち代で、箸の間隔をとることが、重要である。箸の間隔があると、箸が重なりにくく、交差も現れにくくなるからである。

また、「伝統型」と「鉛筆型」は、見え方が類似しているため、正しい位置や使い方を具体的に指導しないと、見え方だけをまねして、「鉛筆型」になる可能性がある。したがって、「伝統型」習得のためには、指の正しい位置と使い方を指導することが重要である。

⑤ 適切な長さの箸の使用

幼児の手の大きさに合わない箸の使用が、箸の間隔をとることや、箸を交差なく、まっすぐに持つことを妨げている可能性があることがわかった。1歳児は12cm程度、3歳児は、14cm程度というように、成長に合わせ、手の大きさにあった箸を使用することが重要である。

渡邊・田中[8]は、3歳児クラスの箸の持ち方を1年6ヶ月観察した結果から、「幼稚園

において特別な指導を行なわなくても、園児の箸使用の技術は何某かの発達を見せる。」そして、「これは、園児の手の機能的発達と学習意欲及び環境によるものであり、消極的な発達と言うべきものであろう。」としている。このことについて本研究でも、同様の見解を得ているが、渡邊らが「消極的な発達」としている部分の「学習意欲及び環境」については、その活性化が、箸の「伝統型」の習得促進につながることを確認しており、箸の持ち方習得には学習意欲及び環境は、重要な項目であるといえる。

「非伝統型」でも、経験の積み上げと修練によって、機能に大きな問題を感じないようになっていく可能性もある。しかし中学生・大学生期においても「非伝統型」の人の「伝統型」の習得意欲はあることからも、「伝統型」習得には、箸を使い始めた幼児期から持ち方を指導していくことが、大切であると考える。

おわりに

本研究では、幼児を取り巻く周囲の環境、励ましが、「伝統型」の習得に向かわせることが、幼児の「箸の持ち方・使い方」や「上手に食べること」への関心を高め、「伝統型」の習得につながっていくことが明らかになった。

「伝統型」でなくても、箸を使って食べることを自己流に会得して、食べることは可能である。しかし、幼児は、「伝統型」を習得することによる波及効果は、機能面以外にもある。「伝統型」を習得し、こぼれにくく、美しいとされる持ち方をして、食べることに適応できた時、自信に満ちた表情をして食べていた。「伝統型」を習得することは、幼児にとって、一生の財産になると考える。

さらに「食べられればいい」とする考え方の段階から、働きかけによって「マナーを考えて食べる」という段階に発展していく。そのために幼児を取り巻く人が、意識的に「箸の持ち方・使い方」を習得できる環境を用意することが重要であると考える。

「箸の持ち方」を食事中に指摘することについては、「楽しく食べる」ことに反するのではないかとする考えもあろう。しかし、機会を捉えて箸の持ち方に意識を向けさせなければ、自然に習得していくことは難しいと考える。

本研究は、日本調理科学会創立40周年平成19年度大会で口頭発表した。

謝辞

本研究に着手するにあたり、園児の観察を許可してくださいました宮野幼稚園（山口市）、嘉川保育園（山口市）、三つ葉保育園（山口市）、華陽保育園（防府市）、ならびに長期的に観察をさせていただきました大内光輪保育園（山口市）の園長先生をはじめ、昼食時にもかかわらず快くご協力くださいました担任の先生方に厚く御礼申し上げます。

引用文献

1）向井由紀子　橋本慶子：箸の使い勝手について－箸の持ち方（その３），家政学雑誌 Vol.34 No.5 269-275 (1983)

2）山下俊郎：用箸運動の発達的分布，東京都立大学人文学部人文学報，27,3 (1962)

3）伊与田治子　足立己幸　高橋悦二郎：保育所給食の料理形態との関連からみた幼児に

おける食具の持ち方および使い方の発達的変化，小児保健研究，55，3，　pp410－425（1996）
4）谷田貝公昭　村越晃　佐藤野里子：箸の持ち方・使い方と作業量の関係について，家庭教育研究所紀要 13，pp13－25　(1991)
5）大岡貴史　井上純子　飯田光雄　石川光　向井美惠：幼児期における箸を用いた食べ方の発達過程－手指の微細運動発達と食物補足時の箸の動きについての縦断観察－，小児保健研究　65，　4，　pp569－576　(2006)
6）岩田浩子　松永洋枝　溝口智子　松下靖子:幼稚園児の昼食にみる箸使用の発達過程，名古屋女子大学　紀要，49　，pp147－154　(2003)
7）一色八郎：『箸の文化史』，株式会社　御茶の水書房，　p217　(1998)
8）渡邊正雄　田中裕子：幼児期における箸使用技術の習熟について（第一報），神戸女子大学紀要，27，pp35－39　(1994)